

# アメリカ企業の女性雇用状況と課題

染谷 真己子

## 序 論

アメリカ合衆国の女性の企業への進出は1970年代から増加傾向にあったが、80年代にはさらに拍車をかけることになる。それは、家計の不足分を補うために、アメリカでも女性が外で働くことがこれまでよりも多くなってきたためである。また、女性の賃金が家庭内の家計を助ける割合は1980年代以降大幅に増加している。

1970年代に女性がそれぞれの企業内部で昇格、昇級を目指すことは非常に難しかったが、80年代になると、少しずつではあるが管理職に登用される人々が現れてきた。企業における女性の昇進には、教育水準の向上が大きく関わっているといわれている。

また、男性との昇進競争にも積極的に参加し、企業での昇格、昇級などが認められた一部の女性は、さらに上級の役職を目指すために、大学の学位だけでなく、大学院で修士号や博士号の取得を目指し、より高い教育を受ける人たちがますます増加して来ている。現在、アメリカの大企業のトップに立っている女性の多くがこの時期に企業に入社した人々である。

しかも、1980年代後半にはまだ女性のエグゼクティブへの道はほとんど開かれておらず、多くの女性は眼前に「グラス・シーリング (Glass Ceiling ガラスの天井)」<sup>1</sup>が立ちふさがっているとされ、これを報じたのはウォール・ストリート・ジャーナル<sup>2</sup>誌であった。そのため、「グラス・シーリング」は1980年代後半を代表する女性論であるといわれている。

「グラス・シーリング」はその後も多くの人々の注目を集め、研究も盛んになったが、もっとも有名なものとしてアメリカ連邦政府が作ったグラス・シーリング・コミッション (Glass Ceiling Commission)<sup>3</sup>がある。また、民間のグラス・シーリング・サーチセンター (Glass Ceiling Research Center)<sup>4</sup>、カタリスト (Catalyst)<sup>5</sup>などもあり、現在でも、これらの組織において「グラス・シーリング」の研究は継続して行われている。

さらに、2000年代になると「グラス・シーリング」に代わり新しい女性論がアメリカに現れた。それはアリス＝リンダによる「Labyrinth (迷宮)」<sup>6</sup>論である。これはそ

























